

## 嘉南大圳設計者 八田與一技師 (4)

—台湾で愛され日本人に知られていない偉大な土木技術者—

川 本 正 之

- |                  |   |
|------------------|---|
| (1) 姿を現した銅像      | (7) 不毛から肥沃へ— 10年の月日を費やして嘉南大圳が完成—                        |
| (2) この人の事を知ってほしい | (8) 李登輝氏は語る— 一米とサトウキビの増産で稼いだ外貨「八田さんの本当に大きな貢献は3年輪作だと思う」— |
| (3) 胸に抱く大計画      | (9) 撃沈— 一つ死んでもお国のためなら本望じゃないか—                           |
| (4) 家族とともに       | (10) 陽光浴びる銅像— 大変な恩恵をもたらした技術に国境はない—                      |
| (5) 前例なき工法       |   |
| (6) 二つの試練        |   |

(本文中敬称略)

### (10) 陽光浴びる銅像—「大変な恩恵をもたらした技術に国境はない」—

銅像の売買は、旧跡として有名な赤嵌楼<sup>せきかんろう</sup>\*の裏手で行われていた。昭和20年(1945)秋、17歳の坂井登は、台南駅前から大八車を引いて銅像を買いに来た中国人の後について行った。買い物を待っていた登は、見覚えのある八田與一の銅像に目を留めた。烏山頭ダム近くに昭和6年(1931)に設置され、昭和19年(1944)年末に金属供出のために撤去されたまま行方不明になっていた。

登の父・茂は昭和5年(1930)の完成まで嘉南大圳の職員で、その後は台南州庁の幹部となっていた。

帰宅した登が告げると、驚いた父は戦後、嘉南大圳を管理した嘉南農田水利会の前身の組織に連絡、「買い取った方がいいのではないか」と持ちかけた。以上が、登の妹・青木生子(72)の記憶による、與一像発見のいきさつである。

與一像は昭和20年(1945)12月には、烏山頭ダムの最寄りの番子田駅<sup>ばんしでん</sup>の倉庫にあったことが確認されており、まもなく烏山頭の管理事務所内に移された。

蒋介石時代、日本人の銅像を隠していることが明るみに出れば、逮捕されるおそれがあった。水利会内部では與一像を保存することに、退役軍人などから反対もあったが、「嘉南平野に大変な恩恵をもたらした人だ。技術に国境はない」との声が勝ったという。

與一の妻・外代樹は、與一の像の発見を知ることはな



写真—13 赤嵌楼(筆者撮影)

かった。終戦直後の、昭和20年(1945)9月1日、夫の造った烏山頭ダムから嘉南平野に注ぐ放水口の奔流に身を投げたからだ。翌日は25年前に嘉南大圳が着工されたその日だった。自宅に簡単な遺書があり、早朝、放水口わきに草履が揃えて置かれているのが見付きり捜索が始まった。遺体は翌日6km下流で発見された。紋付の着物にもんぺ姿で、たもとに石が多数入っていた。45歳だった。

外代樹は16歳で台湾に嫁いでから、一度も帰国したことがなかった。8人の子供を残して死んだ動機は、はっきりとはわからない。戦後、一家を支え苦労を重ねた長男の晃夫は「母を恨んだときもあった」と漏らす。

昭和21年(1946)12月15日、水利会は墓を造り、夫妻の骨を併せて納骨した。石材は大理石ならいくらかもある台湾で、わざわざ高雄にあった福建省産の御影石を

なお、本文をまとめるにあたって、出版社及び著者の了解を得て下記の参考文献から一部、写真及び文章を引用・転載しました。

- 1) 産経新聞「凜として」取材班、「凜として 日本人の生き方」、産経新聞(2005)
- 2) 古川勝三著、「台湾を愛した日本人」、青葉図書

\*赤嵌楼とは、1653年、当時台南を占拠していたオランダ人が、民族蜂起を恐れて築いた台南で最古の歴史的建造物。



写真一14 嘉南の人々によって建てられた八田夫妻の墓

見つけ取り寄せて、日本風に造った。

昭和50年(1975)4月、戦後長く台湾を支配した蒋介石が死去した。水利会では同月、銅像を元の位置に戻す申請をしたが却下された。3年後にもう一度「その筋」の意向を内々にただしたところ、「正式に回答すれば不許可となる」との返事だった。これは黙認の印だと理解された。像が再び烏山頭に注ぐ陽光を浴びたのは、昭和56年(1981)の元旦だった。

戦後の国民党政権下で日本を顕彰する言葉は禁じられ、李登輝・台湾前総統によれば、たとえ専門技術者の間でも、日本人の業績を評価することは「まったくなかった」という。「台湾で八田與一が知られ始めたのはこの20年間のこと。全島で知られたのは、中学校教科書「認識台湾」が1997年(平成9)に出てからですよ」と、編者でもある台湾師範大の呉文星教授はいう。

「台湾を愛した日本人」の著者の古川勝三は、取材で知り合った嘉南農田水利会の呉徳山、黄祭翔両氏から「5月8日は、八田技師の命日です。追悼式を行いますので、よろしかったら一度出席して下さい」と招待されていた。以下に古川の著書から引用する。

昭和57年5月8日、午前10時から八田技師の40回目の追悼式が、珊瑚潭を見下ろす八田墓園内で行われた。やがて、八田夫妻がよく参拝していた赤山龍湖巖から3人の尼僧が来て、追悼式が始まった。年配の農民から若い女性まで、およそ50名余りの人たちが参列していた。誰ひとりとして話している人はいない。静かな墓園に読経だけが快く響いている。最後に全員が一礼して、40分余りの追悼式は終わった。私は日本人として熱いものを胸のうちに感じ、嘉南の人に感謝の念を持った。

「私たちは八田技師の命日には、こうして毎年追悼式をして八田さんの恩を忘れないようにしています。今は、代表者だけ出席していますが、後ほど嘉南大圳のお世話になっている人たちも墓参りに来ますよ」と流暢な日本語で言われた。

みんなに紹介された私は、(台湾を愛した日本人の著者古川勝三)その日持参した新聞の切抜きを出して、近くにいた人に手渡した。その新聞には「無念の靈魂やっと安息」という見出しで始まり、大洋丸の遺族による慰霊祭が、40年後の5月8日、長崎で行われたことを報じていた。

「この撃沈の大洋丸というのは、八田さんの乗った大洋丸だな。今、八田さんが生きていれば、96歳だな」と言った。

すると誰とはなしに、「その新聞をコピーして、皆に配ってくれ」という声が聞こえてきた。

嘉南の人々はまるで偉大な父親を自慢する息子たちのように、八田技師について語り始めた。

「八田さんがこの工事をしなかったら、今でもこの辺りでは米は穫れなかつたらうな。八田さんは、私たちにとってみたら大恩人ですよ」といかにも、土に生きていくといった風貌の人が言うと、続いて他の人が、「大恩人というより神様だな。神様みたいに思っている人が嘉南には多いな」と話す。

日本の統治が終わってから、四十数年経った現在、嘉南大圳に携わった人や、農民だった人たちも今は亡くなり、新しい世代の人たちが引き継いでいるにもかかわらず、八田技師の銅像や墓が大切にされ追悼式まで行われている。

それは、嘉南大圳が与えた恩恵が大きいためだけではなく、八田與一の人間性や外代樹夫人の涙を誘う、最期に感動を覚えたことも見逃すことはできないだろう。

しかし、私はそれだけのことではなく、「もっと他の何か」が有るのではないかと考えた。それは嘉南の人たちの持つ民族性と嘉南の風土が生んだ素朴な心の温かさではないかと思う。

「西欧人は嘘つきと言われるのを最も嫌がり、日本人は恥知らずというのを恐れ、中国人は、恩知らずと言われるのを最も嫌う」という言葉が示す通り、台湾の人々にとって、「恩知らず」と言われるのは「お前は人間ではない」と言われるのと同じ意味を持つ。従って、一たん「恩ある人」となると、その恩を生涯にわたって守ろうとする。この民族性こそが、嘉南大圳の恩恵と共に「八田技師を粗末にする人は、嘉南の人間にはいない」とまで言い切らせるのではないかと、書いている。

平成元年発行「台湾を愛した日本人」古川勝三著より



写真一15(1) 嘉南の人々によって毎年5月8日に行われる追悼式



写真一15(2)

この教科書は日本の統治を評価しすぎているとの批判も受けたが、夫の後を追った外代樹は女性の間で「夫婦愛の美談」として知られ、最近では漫画にもなった。

最後に日本機械土工協会会長から渡された新聞記事には、「八田與一 台湾でドラマ化」と載っている。中華電視の江社長は、八田夫妻を主人公にドラマ化する狙いを「国民党政権時代に歴史から消されていた日本統治時代にも、現在の台湾経済の礎になっている重要な人物がいたことを、台湾の視聴者にももっと知らせたい」と話し、日台の歴史的な結びつきを前向きにとらえている。

また、外代樹夫人は、数千人が働いた現場で生活衛生観念の改善に力を注いだといい、夫が生涯をかけたプロジェクトを支え、最後に自らの人生も重ねた夫婦愛もテーマに描く。

ドラマのタイトルは「水色嘉南」で、八田の命日の5

月8日に烏山頭ダムで撮影を始める。夫人役に松田聖子を起用するとある。松田聖子の台湾ロケは9月ごろの見通し。放送は2006年5月8日から。月曜日から金曜日まで毎日1時間番組とし計20回放映する。せりふは日本語と台湾語を使い、中国語（北京語）の字幕を入れることにしている。

日本でもぜひ放映してもらい、子供たちや若い人たちにも観てもらいたいと思う。

記 2005年4月29日

(以下、次号)

JICMA

【筆者紹介】

川本 正之 (かわもと まさゆき)  
社団法人日本機械土工協会  
技術委員長

## 「建設機械施工ハンドブック」改訂3版

近年、環境問題や構造物の品質確保をはじめとする様々な社会的問題、並びにIT技術の進展等を受けて、建設機械と施工法も研究開発・改良改善が重ねられています。また、騒音振動・排出ガス規制、地球温暖化対策など、建設機械施工に関連する政策も大きく変化しています。

今回の改訂では、このような最新の技術情報や関連施策情報を加え、建設機械及び施工技術に係わる幅広い内容をとりまとめました。

「基礎知識編」

1. 概要
2. 土木工学一般
3. 建設機械一般
4. 安全対策・環境保全
5. 関係法令

「掘削・運搬・基礎工事機械編」

1. トラクタ系機械
2. ショベル系機械
3. 運搬機械
4. 基礎工事機械

「整地・締固め・舗装機械編」

1. モータグレーダ
2. 締固め機械
3. 舗装機械
- A4版/約900ページ
- 定 価

非会員：6,300円(本体6,000円)  
会 員：5,300円(本体5,048円)  
特別価格：4,800円(本体4,572円)

【但し特別価格は下記◎の場合】

◎学校教材販売  
〔学校等教育機関で20冊以上を一括購入申込みされる場合〕

※学校及び官公庁関係者は会員扱いとさせていただきます。  
※送料は会員・非会員とも沖縄県以外700円、沖縄県1,050円  
※なお送料について、複数又は他の発刊本と同時申込みの場合は別途とさせていただきます。

●発刊 平成18年2月

### 社団法人 日本建設機械化協会

〒105-0011 東京都港区芝公園3-5-8 (機械振興会館)

Tel. 03 (3433) 1501 Fax. 03 (3432) 0289 <http://www.jcmanet.or.jp>